昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一日一回發行）

聖書の眞理

第六十四號

二月號

主筆　江原萬里

現代人の最大缺陷　主筆
エレミヤ記の現代的意義
イエス・キリスト　江原萬里
神の國の教（下）
醫しの奇蹟
イエスの權威について（上）　森本慶三
柏木通信　齋藤宗次郎
身邊漫筆　江原萬里
金の世の中
『宗教と國家』の反響

昭和八年(1933)二月一日發行

金の世の中

經濟學者は貨幣とは價値の尺度なりと云ふ。物の長短を量るものに物指しあり、重さを量るに斤量あり、容積を量るに桝があるやうに、價値を量るに貨幣がある。米の容積一石の價値二十圓と云ふが如し。

價値とは元來は物を尊重する程度を云ふのである。尊重する程度は物によつて、又物の量によつて異なる。米一升の價は二升の價より少なく、家一軒の價は米一石の價よりも大である。此等の價値の大小を正しく言ひ顯はすものそれが貨幣である。

一切の事物は人間に卽して悉く價値がある。然し乍ら此等は悉く貨幣を以て言ひ顯はすことは出來ない。誰か親孝行と忠君愛國との價値を貨幣にて量り、君に忠ならんとするは幾圓、親に孝ならんとするは幾圓、故に一方を捨てて他を取るとき幾圓の益ありと云ひ得るものがあるか。人の人格は神に於て無上の價値があることがイエスに由つて明にされた。誰かその價値を貨幣にして量り、誰某の人格は萬金の價あり、誰某はゼロと云ふ者があるか。人間にとつて眞に價値ある者は貨幣では量り得ない。貨幣で量り得られるものは只物的のものだけである。

然るに現代は物質的の世の中である。人間の靈魂は胃袋と同じものである。かく靈魂の欲求滿足が飽衣飽食と同一となつて、一切のもの悉く貨幣を以て其の價値を量り得られるやうになつた。曰く貞操の代金幾何と云ふが如し。

我が國は教育が甚だ盛である。何處の家庭でも子弟の教育に熱中し、學校だけでは尙足らず、家庭教師を傭ひ、夜は十二時過ぎまで勉强をさせて居る者も少なくない。一體何のために斯く教育に熱心なのであるか。目的は金である。教育は最良の投資と心得て居るのである。

教育は最良の投資となつて仕舞つて、小學校の女教員が夜はカフェーの女給となつて稼いだとて毫も怪しむに足らない。金ほしさに女教師をするのであるならば、夜は街の女となつてまでそれを得やうとするのも無理はない。校長が不在中授業をやめて男教員は將棋をさし、女教員はミシンで自分の子の着物を縫ひ、兒童は教室の窓に上つて遊んで居たとて何の不思議があらう。これが基督教を排斥し忠君愛國を教育の根幹とした我國の現狀である。現代の道德的墮落の因つて來るところは甚だ深い。

聖書之眞理
昭和八年二月一日發行
第六十四號

現代人の最大缺陷

現代人の最大缺陷は心に感謝の念のないことである。あるものは不平と不滿と不安だけ。彼等は太陽が毎日東天から出て萬物を照すことを感謝しない。當り前のことと考へる。毎日食ふに食あり、寢るに家ある事を感謝しない。親あり子あり、妻あり夫あり、親しき友ある事を感謝しない。人に對しては常に不平、己に對しては常に不滿、絶えず此の先どうなるかの不安に脅されて心に何の歡喜もなく、從つて感謝がない。

彼等にかく感謝の念のないことは其の求めるところが物質的であつて精神的でないからである。其故に渴ける餓鬼のやうに、地位を得、收入を增し、善き家に住み、美くしき衣服を纏ひ、豐なる食をなし、欲する物を買ひ求め、遊び度い所に遊ぶことを願ふ。それが出來ない故に不平なのである、不滿なのである、絶えず不安に襲はれて居るのである。人に對してせられんことを多く求め、人に爲さんとしない。人が自分に爲して呉れた恩は直ぐ忘れ、自分が人に爲した僅かのことはいつまでも覺えて居て、その者が自分の好意に報ひないことを怒る。若し人が自分の求に應じなかつた時は終生怨む。

之が現代である。かやうに人の願が物質的である限りどんなに產業が發達し、富が增し、文明が進步したとて此の世は美はしい天國とはならない。假令現代の社會組織を一變して共產社會とするも同樣である。人は神を信ぜざる限りカーライルが云ふやうに『滿されざる五感はその儘。不滿足の第六感（虛榮心）と惡魔的人間性とは其の儘。何の規律も何の羈絆もなく、盲目に追ひやられる』のである。此の心が革命を受けずして、卽ち一新せられずして、如何に物に富むとも、又社會制度を改めるとも、理想の社會は出現しない。

エレミヤ記の現代的意義

エレミヤ記を精讀して最も深く感銘させられることは神の實在である。神は單純なる力ではない。又天然自然の大生命でもない。我等と同じ人格を有し、明白なる性格あり、何よりも義しく且つ憐憫深く、聖くして且つ智慧あり、能力あり、不義を怒り、正義を喜び給ふ。かかる神が我等各自の生涯の主であり、又社會の原動力歴史の創造主であり給ふと云ふことである。されば此の神に背いて國は滅びる。然かも神は誠實に在せば、最初から人を救はんとし給ふ其の聖意を渝ゑ給はない。故に其の聖意に賴つて我等は安全である。此の事を我等に强く感銘せしめるものがエレミヤ記である。

此故にエレミヤ記は現代に於て明白にマルクスの唯物史觀を否定する。マルクス主義はかやうな人格ある神を認めず、社會の原動力を人間の衣食住の必需品を生産する社會的物的生産力であるとする。而して此の力に賴つて善き社會の出現を期待する者である。是明に偶像崇拜である。眞神に背いてどうして其の事業が成功しやう。

エレミヤ記の現代的意義の第二は國家至上主義に反對することである。神は國家以上に高く在し、正義を以て人類の歴史を指導し、創造し給ふ神である。故に如何なる國と雖も正義に背く時は必ず其の罰を受ける。故に國家以上の正義の存在を認めざるもの、或は正義の名を以て國民的野心を逞しくする者、或は武力に賴んで己が劃いた理想を遂行せんとする者の必らず徒勞に終ることを主張する。

エレミヤ記の現代的意義の第三は教會主義に反對することである。最も神と親しかつたエレミヤの生涯を見て誰か神は各自の心の奥底に於て最も深く相交り得るものであることを認めないものがあらうか。エレミヤは最初の而して最大の無教會主義者であつた。

エレミヤ記の現代的意義の第四は現代の物質至上主義に反對することである。最も神と親しく最も有意義なる生涯は快樂の追求でなく義務の履行である事を教へる。我等の犧牲心を勵ますのでエレミヤ記の如きはない。

イエス・キリスト（五）

江原萬里

一〇　神の國の教（下）

主の祈

かやうにイエスの建設し給ふ神の國では、現世の社會に在つて最も價値ありとされて居るものが全く無價値となり、無價値として棄てられて居る者の中に神の國に入り得る資格を認められる。我等が此の世を住み心地よしとし、之を我が世と思ふ時、その時程神の國に遠き時はなく此の世に住み難きを嘆じ、現世の不幸に惱む時、神の國は我等に近づいたのである。光明が暗黑を通して輝き出るのである。

されば神の國は現世に接續し、現世の進歩の結果として到達するのではない。天から降るのである。兩者相反する事は天の地から遠き如く、東の西から相去るが如くである。兩者妥協を許さない。神の國の教は現世の如何なる教とも折衷さるべきものではない。

誰も新らしき布の裂を舊き衣につぐことを爲じ。補ひたる裂はその衣をやぶりて、破綻さらに甚だしかるべし。また新らしき葡萄酒をふるき革囊に入ることは爲じ。もし然せば囊はりさけ、酒ほとばしり出でて囊もまた廢らん。新らしき葡萄酒は新らしき革囊にいれ、斯て兩ながら保つなり（マタイ傳九・一六、一七）

然らば神の國の立てる根本原理は何であるか。それは前にも述べたイエス御自身であり、彼が有ち給ふ眞人としての人格とその父なる神に對する父子の關係がそれである。我等彼を受け、その生命に與り、天地萬物の創造主を父よと呼び奉つて之に仕へ、之に信賴して生きることである。此の神の國の眞髓はイエスが『汝らは斯く祈れ』と云つて、之を弟子たちに教へ給ふた『主の祈』に在る。

天にいます我らの父よ、

知り給へば、我等は何を着、何を食はんとして思ひ煩ふことなく、只管神に信頼し、その御國とその義とを求むべきである。それを信頼せず、物慾のために心を煩はすことは神に對する大なる罪である。マンモン（財神）に仕へるのは神を信じないからである。

然り、神に對して絶對に信頼し、その絶えざる御導きに服從することが神の國の義である。信頼と云ひ、服從と云ふのは心の中の事であつて、外なる行爲のことではない。心が純眞に他の思を交へず、只管に神に頼よることである。孤疑し逡巡するの心ある時はそれは信頼ではない。神は我等の心の奥底を注視し給ひつゝある。神はそこで我等を愛し、我等に語り給ふ。それ故我等の亦心の奥底に神を迎へ、義しく歩まねばならない。

古への人に『殺す勿れ、殺す者は審判にあふべし』と云へることあるを汝らきけり。然れど我は汝らに告ぐ。すべて兄弟を怒る者は審判にあふべし（マタイ傳五・二一、二二）

之を要するに神の國の義は徹頭徹尾、心から神を父として之に信頼し、その恩惠のうちに生き、聖意を我等の最善として之に悦服することである。神は我等の父であり我等を限りなく愛し給ふ。世の如何なる廢物、屑物をさえ渾身の愛をもて愛し給ふ。故に神に絶對に信頼し、その聖意を最善として悦服せば我等も亦同胞に對して之を愛せずには居られない。貧しき者、飢えた者、泣ける者棄てられた者、罪に惱める者、神が彼等を先づ神の國に入らしめ給ふならば、我等も亦彼等とその恩惠を共にすべきである。

『なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし』と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。（マタイ傳五・四三——四五）

此の愛、これが天に在す父の愛である。之を我等が實行して我等はその子に相應しきものとなる。

然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ（五・四八）

である。神を父として拜し、其の愛に絶對に信服する結果は必然に同胞に對する愛として顯はれる。

愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おほよそ愛ある者は神より生れ、神を知るなり愛なき者は神を知らず。神は愛なればなり。……愛と云ふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり。愛する者よ、斯の如く神われらを愛し給ひたれば、我らも亦たがひに愛すべし。われらの愛するは神まづ我らを愛し給ふによる。人もし「われは神を愛す」と言ひてその兄弟を憎まばこれ僞者なり（ヨハネ第一書四・七——二〇）

福音にして律法に非ず

貧しくして家族が日々飢ゑて居る者、人生の峻しい行路に迷うて途方に暮れて居る者、詮方つき暗中に呻く者憂愁に泣く者、己が罪に悶える者、此の世に於て最も不幸とされる彼等が實は最も幸福であり、神の國は彼等の所有であると云ふイエスの教程信ずるに困難なものはない。眞實此の世の不幸は神の國の幸福であるか。その容易に信じ難いのはそれが餘りに善過ぎ、餘りに福音であるからである。

然るにイエスは又他方、『我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者・パリサイ人に勝らずば天國に入ること能はず』と云ひて、モーセの律法よりも尙嚴格なる教訓を教へ給ふた。曰く、殺す勿れではない、憎む勿れである。姦淫する勿れにあらず、色情を懷いて他人の妻を見る勿れである。善に善を、惡に惡をでなくして絶對無抵抗、右の頰をうつ者に左をも向けよ、己に善き者をのみ愛するのでなくして自分を傷ける者を愛せよと。之れ如何なる聖人君子も難しとするところ、世の廢物、屑物が之を實行出來やうか。

然るにイエスは權威をもつて之を教へ給うた。

イエスこれらの言を語りをへ給へるとき群衆その教に驚きたり。それは學者らの如くならず、權威ある者のごとく教へ給へるなり（マタイ傳七、末節）。

當時の學者たちは自說が絕對に正しい事の根據を古人の言に求めた。安息日に過越しの節の小羊を屠りても可なりとの主張はシャマイの如き大學者も其の先輩の言說を引用しなければ何人も之に信を置かなかつた。此の時に當り、イエスは「古への人に「殺す勿れ」と云へることあるを汝等きけり、我は汝らに告ぐ」と云ひて、古來ユダヤ人が神聖無比とし、そのためには死を辭せず、之に反する者は石にて打ち殺して差支ないとしたモーセの律法を他の權威によることなく、全く自己の權威を以て之を修正し給うたのである。彼の中に何者かモーセ以上の神聖侵すべからざる權威があつて、イエスは全世界に對して之を語り給うたのである。

イエスの教は古來の聖賢の教の粹を鍊めたものではなかつた。それに理論的體系を與へたものでは勿論ない。永遠の眞理、此の大宇宙の創造原理、神の聖意の直覺であつた。自ら眞人として父なる神と親しく相語り、神の聖意と全く一つになつて把握し、體驗し給うた永遠の生命の言であつた。宇宙最高の法であつた。而してそれは只單なる道德訓ではない。イエス御自身の生活其の者であつた。故に彼は自己の權威を以て語り給ひ、之を聞いた人々は何者か偉大なる者の彼の中に存することを知つて驚いたのである。

人々皆驚き相向ひて言ふ。『これ何事ぞ、權威ある新らしき教なるかな。穢れし靈すら命ずれば從ふ』（マルコ傳一・二七）。

眞の教師とはかゝる者を云ふ。眞に人に師たる者は、只正確なる知識を傳へるだけの者ではない。又最も要領よく教へ込むだけでは足りない。其の一言一句悉く生きて居て之を聞いた者に知識でなくして永くその生命を宿さしめる者がそれである。而して其の教へる主題が人間の靈魂の最も深いところに關係すればするだけ、教は益々單なる知識でなくして教ふる者の人格その者である。イエスの教に人々の驚く權威があつたのは、その教の言でなく、その背後の彼の人格であつた。人々はその崇大に驚き、心がそれに惹きつけられ、思はず知らず全身を獻げしめられたのであつた。

彼の人格の中心は愛であつた。之が永遠に神と偕に在り、造られた萬物は一つとして之に由らずして造られたもののないロゴスである。此の愛が我等の上に顯はれ、惱み多き人生の光明となり、悲痛に泣く者を慰め、絶望に呻く者に再起の力を與へ給ふのである。彼を信じて、彼の教の眞理であることを知るのである。彼は他方最高の道德を教へ給うた。如何にして之を行ひ得るか、それは肉に於て弱い我等のうちに在つて彼が我らをもたげ、愛を以て勵まし、義をもつて導き給ふからである。

われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり（マタイ傳五・一七）。

我等が成就するのではない。彼が我等を愛し給ふその愛に由つて之を成就し給ふのである。それ故『山上の垂訓』は新しい律法ではない。之は御國の福音である。

イエスは我等の惱みを取り去り、不幸を癒し、我等が弱くして實行し得ない道德を容易く行ひ得るやうに爲し給ふのである。彼は我等をして律法の束縛から脫して自由の子とし、心から義しき者にし給うのである。凡そ基督教を道德と思ひ、倫理上の規則と思ふ位大なる誤はない。之こそは福音である。成程聖書には之を律法と云つた場合がある。パウロは『なんぢら互に重きを負へ。而してキリストの律法を全うせよ』（ガラテヤ書六・二）と云ひ又『然らば誇るところ何處にありや。既に除かれたり。何の律法に由りてか。行爲の律法か。然らず、信仰の律法に由りてなり』（ロマ書三・二七）と云つた。只之だけならば、福音は一見律法の一種の如く見える。又ヤコブも亦之を『全き律法、すなはち自由の律法』（一・二五）と云つた。然し乍ら自由の律法とはそれ自身矛盾である。律法は自由を束縛する者である。之から『キリストは自由を得させんために我らを釋き放ちたまへり』（ガラテヤ書五・一）である。それであるから福音である。

イエスの神の國は始めから終りまで福音である。之は道德の規則ではない。モーセ以上に嚴格なる律法ではない。此の中に入ることは精神上に又物質上に其の自由を得、冷酷なる道德命令の奴隷たることから釋放されて、

自由となり、神の愛子として、父の完全なるに似て子の完全を得させられるのである。自ら物的に餘裕があつて生活に困窮せず、心に何の煩悶もなく、苦惱なく、殊に自己の罪に苦しめられず、自分の力で自分の救を完うし得るものと信ずる者は、基督教を以て人類の最高の道德とし、其の眞髓を握まない。キリストに由つて神が無條件に我等の罪を赦し、之を受容れ、愛し、永遠の喜に入れ給ふことを知らない。彼等には基督教は一つの理論的體系となり、教會制度となり道德的法則となつて仕舞ふ。

然し乍らイエスの來り給ふたのは醫師のたすけを要しない健かなる者にでなく、病める者を醫さんがためである。

『我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり』（マタイ傳九・一三）といひ給ふ。何等の功績のないもの、神から何らの報賞に價しないもの、眞實罪に惱む者、之等が迎へ容れられて神の國の民となり、キリストの生命に化せられて、眞實聖き民となり、義くして愛、謙遜にして偉大、神がその像に肖せて創造し給ふた眞人となり得るのである。

誰かイエスの如く確信をもつて、神の律法を破り、その罰を身に負ふ世の廢物等に最大の幸福を約束した者が他にあるか。誰がイエスの如く人々の至難とする最高道德を束縛として人に課せず、自由の道として提供したものがあるか。誰が彼の如く、人間の最惡のうちに最善を發見し、最も卑しい者のうちに神に似た聖潔を獲得し得る能力を認め得たものがあるか。神の國は彼なくして地上に出現しない。然り、神の國は彼のうちに在り、彼に由つて立ち、我等に及び、彼が完成し給ふものである。何の孤疑するところなく、彼の招きに應じて、己を捨てゝ彼の生命を我が物とせばよい。イエスの教へ給ふた『主の祈』をそのまま我が祈として神に獻げ、その通り生きればよい。かく此の祈は何人も祈り得る者である。敢て智者能者をまつを要しない。惱める者程之を祈り得る。然かも之を心から祈り、全くその通りに神を信じ、只管それに生きる事は、基督者ならずば此の世の如何なる偉大なる人物と雖も善くなし能はざるところである。

一一　醫しの奇蹟

我もし神の御靈によりて惡鬼を逐ひ出さば神の國は既に汝らに到れるなり（マタイ傳一二・二八）。

救主たる實

イエスは此の世に在つて最も不幸と見られ、生き甲斐のない者と思はれる者が最も幸福であり、神の國に入り得る者は先づ彼等である事を教へ給うた。イエスが之を教へ給ふや、學者らの如くならず權威ある者の如く教へ給ふた。それ故之を聞いた群衆は皆『驚き、相向ひて言ふ。これ何事ぞ、權威ある新らしき教なるかな』（マルコ傳一・二七）と云ひ、又『その口より出づる惠の言を怪しみ「これヨセフの子にあらずや」』（ルカ傳四・二二）と不思議に思つた。

彼の崇い教は彼の全人格の言である。それ故彼の教を信ずることは彼の全人格を信ずることである。イエスの教が此の世の智者たちの思想と全然異なるのは、彼の人格が何人とも異なるからである。彼が『されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者の爲に祈れ、これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり』（マタイ傳五・四四、四五）と教へ給うたのは、彼自身眞實仇を愛し、責むる者のために祈り、彼等のために己が生命を棄てて盡くし給うたからであつた。『これ天にいます汝らの父の子とならん爲めなり』とは彼に於ては現在そうであつた。それ故に彼の教に權威があつたのである。

彼は又『幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん』（マタイ傳五・四）と云ひ給ふた。之れ只口先だけの慰めの言ではなかつた。彼が實際悲しめる者を慰め得る能力をもち給うから、此の言が永遠の眞理であるのである。イエスは神の國の到來を教へ給うた。それはイエスに由つて實際我等の心の奥底にて嘆求して居る一切の善きものが、我等に得られるからである。我等は貧に惱む。病に患ふ。憎まれ棄てられて心憂ふ。殊にこれ等の不幸の源として我等と神との間の離隔を思ふて罪に悶える。イエス來つて之らの不幸から我等を救ひ出し給はなけれ

氣を回復したのみではない、榮光輝く體に化して復活し給ふたのである。此の事實なくしては基督教なるものは世界に存在しなかつたのである。此の事は何人も異存はない。現代の自然科學の如何に拘はらず、奇蹟は實際世に有る。

若し奇蹟を否認する者の言に從つて、イエスの生涯から全部奇蹟を削除して見よ、又之を自然現象として說明し去つて見よ。而して後に何が殘るかを驗べて見よ、イエスの存在は幽靈のやうに影だけとなるであらう。少なくとも彼の教訓だけは殘ると云ふか。それは只美しく見えるも力のない空論となつて仕舞ふ。イエスの教の大部分はイエス自身行ひ給ふた奇蹟に關連して學者と論爭し民衆を教へ給ふたものである。若し此の奇蹟を虛僞とせばそれに關連して說かれた教は根據を失つて仕舞ふ。又イエスの美はしい道德訓は只單なる教訓ではない。奇蹟を行ひ得る彼の能力に信賴して始めて實行出來る教訓である。彼の奇蹟能力を否認する者は彼の教の實踐價値を疑ふ者となる。結局イエスを神話的人物として之を抹殺するのが論理的必至である。

イエスは明に奇蹟を行ひ給ふた。彼が難病を醫し給ふたのはルナンの云ふやうに手品ではない。又マシュー・アーノルドの云ふやうに催眠術ではない。イエスの醫しの御業の中には或は自然的法則を以て說明し得るものもあるかも知れない。然し乍ら、其の中只一つでも本當に奇蹟を行ひ給ふたならば、イエスは明に自然を制御する能力を有し給ふた事を承認しない譯にはゆかない。誰が癲病を催眠術や手品で直し得る事が出來やうか。

我等はイエス在世當時のユダヤの醫學の發達狀態を知らないが、それから百年から三百年までに亘る醫學の狀態はタルムードに詳しく記載してある。之に由れば百年間に驚くべき急激の進步のない限り、當時は餘程醫學が發達して居たものと見なければならない。彼等はどの病氣は人間の醫術で醫し得られるか、どの病氣は醫し得られないかの限界をよく知つて居た。それ故民衆だけでなく學者たちもイエスが人間業では到底醫し得ないと見られる難病を醫し給ふたから驚いたのである。イエスが醫

し給ふたことは奇蹟であると認める事については、彼等は何の異存もなかつた。只問題は此の奇蹟を行ふ能力は一體どこから來たかであつた。

奇蹟は神の能力

當時一般にユダヤ人は病はエホバが醫し給ふ者と信じて居た。ルユーキン・ウキリアムス氏は云ふ。

民衆はメシヤ出現の日には、俄かに健康が增進し、虛弱と病氣とに對して驚くべき勝利が得られるものと眞實期待して居た。何故なれば、生命と人間の精力とは最高點に達し、病氣は逃げ去るからである。

（イザヤ書三五・五、六參照）

それ故民衆はイエスの奇蹟を見て直ちに彼をメシヤと信じたのである。勿論之はイエスの好み給ふところではなかつたが、學者が之を否定して、モーセの律法に反して安息日に病を癒すところから察するに、之は神の業でなく、屹度惡魔の所業であらうと推斷したのに對しては、彼は之を反駁して一言もなからしめ給ふた。

ここに惡鬼に憑かれたる盲目の啞者を御許に連れ來りたれば、之を醫して啞者の物言ひ、見ゆるやうに爲したまひぬ。群衆みな驚きて言ふ。「これはダビデの子（即はち救主のこと）にあらぬか」。然るにパリサイ人ききて言ふ。「この人、惡鬼の首ベルゼブルによらでは惡鬼を逐ひ出すことなし」（マタイ傳一二・二二――二四）

之に對しイエスは病を醫す力は神から來る。然るに汝らは之を惡魔の業とするは正しく神の御靈を瀆すことであると云ひて反駁し、且つ彼の奇蹟を否認する者に對して嚴肅極まりない警告を與へ給ふた。

この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と瀆とは赦されんされど御靈を瀆すことは赦されじ。誰にても言をもて人の子に逆ふ者は赦されん。然れど言をもて聖靈に逆ふ者は、この世にても後の世にても赦されじ

（同上三一及び三二）

人の凡ての罪を瀆は赦される。その結果である病氣も亦醫される。然し乍ら罪が赦され、病氣が醫されるのは神

の御靈に由るのである。此の事を否認し、御靈を瀆す者は赦される術がない。何人も「人の子」即ち、我の何人であるかを知らずして之に逆ひ、さまざまの惡口を言ひ觸らし我を迫害し、我を十字架に釘けて殺す程の大罪を犯すとも、その罪は赦されるであらう。難病が癒えたのを神の恩惠であることを知らないで之を藥物に歸するとも無害である。然るに一度我が中に在る神性を知り、我が神の子である事を認めながら、之に逆ひ、其の愛を拒み、その醫しを惡魔の業として聖靈を瀆す者は、現世はおろか未來永劫に其の罪は赦されないとの驚くべき怖るべき宣言である。此の御言はイエスが奇蹟を以て難病を醫し給ふた時、之に關連して語り給ふたものである。

永く難病を患ひ肉も骨も削られ、人生の一切の光明から遮斷され、暗黑の中に彷ひ、死の蔭に座する者が、神の御能力に由つてその病が醫された時の彼等の歡喜はどんなものであつたであらうか。

人が病苦を感することは今も昔も、文明人も未開人も變りはない。神學者として又音樂家としての輝く天才を何の惜し氣なく拋棄して、夫妻諸共アフリカの原生林に奥深く入り、數百の土人の醫療に身を献げつゝあるアルベルト・シュヴアイチエルは云つた。歐州人はアフリカの土人は病氣について歐州人程の苦痛を感じないであらう。あたら一生を其等の者のために棄てることは馬鹿なことだと云ふが、自分の經驗したところではそうでない。彼等も矢張り我等と同樣人であつて、同じやうに病苦に惱んで居るのであると。

自分で實際に病の苦痛を經驗しない者はそれが解らない。從つて病者に對する深い眞實の同情が起らない。只冷たい頭腦に考へられるだけの自然しかなく、病苦の如何なるもの、又之を醫す力の何なるかがわかる筈がない。自ら病苦を感ぜず、心の奥底から病者に同情のない道學者パリサイ人は只神に服へ、十字架を負へと勸めてイエスの御心とその能力とを傳へ、之に信賴することを敎へない。然し乍ら人生は狹苦しい科學の世界よりも遙に廣く、そこで得た學理よりも遙に複雜である。又通り一偏の道義を以て律するには餘りに深刻である。身自ら

親しく長病に苦しんだ者の煩悶は到底彼等の言ふところでは納得されず、あきらめられず、勿論滿足されない。

何故か。それは我等の病の苦しみは多くは我等の肉體の苦痛であるよりも寧ろ靈魂の苦痛であるからである。苦痛とは肉の痛みでない。心が苦しむのである。惱むのである。煩ふのである。病が醫されることを仰望するのは、只單に健康になつて食ひ度いものを食ひ、遊びにゆき度いところに遊びにゆき、出來るだけ安易と快樂とを享受し度いと願つて居るだけのものではない。此の難病それは一體何處から來たか。將に襲ひ來らんとする恐怖の王、死は何處に我をつれゆくか、一體我は何故かく暗黑、死の蔭に座することを餘儀なくせしめられたか。此等の事を思ふ時、何かしら自分の靈魂は廣く明るい宇宙の外に棄てられ、神から繼子とされて居ることを感ずるのである。神の聖意に背反する罪、宇宙の大道との違和が我が靈魂の奥底に內在することを思ひ、これから解放され、病が醫されんことを願ふのである。卽ち、罪の赦の證據としての醫しを求めてゐるのである。

病苦は何人にもある。而して病苦が深刻であればあるだけ、何人にも靈魂の此の深い欲求があるのである。文明と未開と、賢と愚、今と昔の區別はない。然し乍ら、古來世界人類中最も宗教的天才として知られ、病氣を以て神の刑罰と教へられて來たユダヤ人に取つては、人の醫し得ない難病は靈魂の堪え難い苦痛であつた。此の病から醫されて、彼等は眞に神の恩惠を感謝したのである。それは神がその罪を赦し給ふたことを意味した。

イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給ふ。視よ中風にて床に臥しをる者を人々みもとに連れ來れり。イエス彼等の信仰を見て、中風の者に言ひたまふ。「子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり」。視よ、或る學者ら心の中にいふ。「この人は神を瀆(けが)すなり」。イエスその思を知りて言ひ給ふ。「何ゆゑ心に惡しき事をおもふか。汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふと、孰(いづれ)が易き。人の子、地にて罪を赦す權威あることを汝らに知らせん爲に」かく云ひて中風の者に言ひ給ふた。

「起きよ床をとりて汝の家にかへれ」。彼おきてその家にかへる。群衆これを見ておそれ、斯る能力を人にあたへ給へる神を崇めたり。（マタイ傳九一・一―八）。

かやうにイエスが我等の病患を醫し給ふのは、イエスを通じて父なる神の御能力が顯はれたのであつた。彼が我等に來り、我等の病苦を醫し、我等の貧苦を救ひ、さまざまの惱みを取去り給ふのは、神が我等の罪を赦し、神と我等との間の隔てを取り去り、神の恩惠が自由に我等に及んだからである。イエスが奇蹟を行ひ給ふた事實は毛頭も疑ひない。それは天地萬物を創造し給ふた神の能力の顯はれであつた。天地を創造し得る神が病を醫し得ないことがあらうか。神は今尙キリストを信じて神に對する罪の赦されたる我等に自由に恩惠を注ぎ、我等の病苦、貧苦、其の他の苦惱を取去り給ふのである。かかる救主を與へ給ふた神をこそ讃美すべきである。

奇蹟の行はれる場合

天地を創造し給ふた神はその被造物に由つて縛られ給はない。神は自然の法則の奴隷でなく、その主であり給ふ。されば神の御意は科學者の顯微鏡下に顯はれるよりも、寧ろ我等の止み難い願、神を求める心情に顯はれ、我等の祈は聽かれるのである。世に奇蹟はある。あるのは自然の法則以上に之を創造し給へる神が在し給ふからである。然かも神は無意味に奇蹟を行ひ給はない。我等が見て自然の法則とする自然の秩序の中に珍らしい事をなし給ふのは、特に神が此の宇宙完成上、神の御旨に適へりと見給ふからである。故に奇蹟に由つて普通の現象以上に我等は神の聖意を知り得る。聖書に於ては奇蹟とは奇術のことではない。只單に不思議な珍らしい事柄を意味しない。之を徵（しるし）と云ふ。其の意味は神の人類救濟、宇宙完成の聖意の特別の顯れと云ふ事である。

神在し給ふ限り、天地に奇蹟はあり得る。一度神ありと信ずる者は奇蹟の可能は信じ得られる。さればイエスに神の御能力が顯はれ、イエスが奇蹟を行ひ給ふたとて不思議はない。我等が熱心に知り度いことはイエスはど

う云ふ場合に奇蹟を行ひ給ふかである。どう云ふ場合神の特別の恩惠なる御能力が顯はれて、我等の難病が醫されるかである。又普通の事情では到底なし得ない不可能事が行はれるかである。之こそは人生の重い荷を負ひ、冷酷の如く見える自然の法則の下に呻いて居る我等の重大關心事である。

一

我等が先づ第一に知ることは、イエスの行ひ給ふた奇蹟は彼が父なる神に對する絶對の服從と信頼との結果であつた事である。イエスは父なる神の聖意に反しやうとする一切の誘惑を克服し、父の御意の外何事も願はず、爲さず、全く之と一つになり給ふた、此の絶對の服從と、父なる神は何事にても彼の祈は必らず之を聽き、彼が信ずるやうになし給うとの絶對の信頼、此の二つに由つて神の能力はイエスを通じて顯はれたのである。彼がラザロを死から甦らし給ふた記事を見よ。此の事が明かである。イエスはラザロの墓の石を取除かせ給ふた。而して天を仰いで祈り給ふた。

イエス目を擧げて言ひ給ふ。「父よ、我にきき給ひしことを謝す。常にきき給ふを我は知る」（ヨハネ傳一・四一、四二）。

かく祈つて後、彼は確信を以て大音聲に「ラザロよ、出でよ」と呼び給へば、既に死んで四日となつたラザロは甦つて墓から出て來た。ベンゲルは云つた。若し「ラザロよ」と名指し給はなかつたならば、そこいらの死者は悉く甦つたかも知れないと。此の驚くべき奇蹟はイエスが父なる神に常に絶對の服從と信頼とをなしつゝあり給ふ事に由つて、その祈に答へて我等の眼前に顯はし給ふた神の聖意と能力との徵であつた。

二

次に注意すべきことは、イエスは自分自身のためには只の一度も此の能力を用ゐ給はず、人々に奇蹟を示し給はなかつた事である。彼は荒野の誘惑で之を拒否し給ふた。學者たちが、「師よ、われら汝の徵を見んことを願ふ」と云つて、イエスがメシヤであり給ふ證據として奇蹟を行つて見せて下さいと願つたのに對してイエスは、

邪曲にして不義なる代は徵を求む。されど預言者ヨナの徵のほかに徵は與へられじ（マタイ傳一二・三九）と云つて之を拒み給ふた。最も顯著な事實は、此の大なる能力の主なる彼が祭司たちに捕へられ、ロマの兵卒のために十字架に釘けられ乍ら、何の抵抗をもなさず、彼等の爲すがままに爲さしめ給ふたことである。人々は彼を嘲つて云つた。

人を救ひて己を救ふこと能はず、彼はイスラエルの王なり、いま十字架より下りよかし。然らば我ら彼を信ぜん。彼は神に依り賴めり、神かれを愛しまば今すくひ給ふべし。「我は神の子なり」と云へり。（マタイ傳二七・四二、四三）

此の嘲罵のどんなにか深刻であるかを考へて見よ。死者をも甦らし得る程の異常なる能力、只一言を以て風波を制し給ふ彼がむざむざ十字架に釘けられ、小人輩、惡人共からの此の嘲罵を浴せかけられ給ふたのである。

おい、さまはないぞ。人は助けたが自分で自分を助けることが出來ないとは何てゐことだ。それでこそお前はわし等の本當の王樣だ。どうだ。下りられるならば今その十字架から下りて見せろ、そうしたらわしらは本當に信じるよ。お前は神樣により賴んで居る。若し本當にお前が依り賴んで居る通り、神樣がお前を愛していらつしやるなら、今こそ救はねば救ふ時はありやしない。それを救はないならお前の信心は間違つて居るぞ。

然かもイエスは只の一言も之に答へず、彼等が嘲けるまゝに任せ給ふたのである。まことに彼等が云ふやうに「人を救ふて己を救う能はず」であつた。

三

然らば彼の奇蹟はどう云ふ場合に顯はれたか。それは悉く「人を救ふ」ために顯はれた。イエスの醫しの御業は我等の苦惱に對する深甚の同情の發露であつた。愛以外の何者でもなかつた。彼がラザロを甦らし給ふたのも此の愛の御業であつた。愛に天然以上の力あり、此の奇蹟を行ふ。

マリヤ、イエスの居給ふ處にいたり、之を見てその

足下に伏し、「主よ、もし此處に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを」と云ふ。イエス……心を傷め悲しみて言ひ給ふ。「かれを何處に置きしか」。彼ら云ふ。「主よ、來りて見給へ」。イエス涙をながし給ふ。爰にユダヤ人ら言ふ。「視よ、いかばかり彼を愛せしぞや（ヨハネ傳一一・三二——三六）。

人の悲喜憂樂の何物にも感じ易きイエスの至純の情、如何なる人の叫びにも直ちに應ずる彼の憐憫、人々の悼み泣くを見て自らも心潰れ、潸然として涙を流し給ふ。この愛これこそ父なる神と一つに在し給ふ愛であつた。それ故彼は神の愛を顯はし、死者復活の絶大の奇蹟をすら行ひ給ふたのである。彼が人々の病患を醫し給うたのは悉く此の無我、否、己を人に與へる愛、同情、憐憫の御業であつた。人間の如何なる苦惱にも彼は無關心であり得なかつた愛の顯であつた。

イエス大なる群衆を見、これを憫みて、その病める者を醫し給へり（マタイ傳一四・一四）。

一人の癩病人みもとに來り、跪づき請ひて言ふ「御意ならば我を潔くなし給ふを得ん」。イエス憫みて手をのべ、彼につけて「わが意なり、潔くなれ」と言ひ給へば、直ちに癩病さりて、その人きよまれり。頓て彼を去らしめんとて、嚴しく戒めて言ひ給ふ、「つつしみて誰にも語るな」（マルコ傳一・四〇以下）。

ルカ傳に由れば此の「全身癩病をわずらふ者」を憫みイエスは彼に手をつけて之を醫し給ふた。癩病の末期、全身膿みただれ、人は皆顏を覆ふて避ける者にイエスは手をつけ、「わが意なり」と云つて之を醫し給ふたのである。マタイ傳はイザヤ書第五十三章の句を引いて云ふ。

「かれは自ら我らの疾患を受け、我等の病を負ふ」

と言はれし言の成就せん爲なり（八・一七）。

と。「わが意」とは之である。その憐憫は全身膿みただれた癩病人を抱きかゝへる同情であつた。自分自身それに代らうとする愛であつた。誰かかかる愛を以て見ず知らずの癩病人を愛する者があるか。イエスが絶對に己を棄て、全く父なる神と一つになり給ひ、而して彼の祈が

父なる神に聽かれ、神の天然を制御し給ふ能力が彼に顯はれ、彼が絶大の奇蹟を行ひ給ふたのは、此の愛に由つた。これが神の愛である。天地の創造、攝理、我等の罪の救濟、宇宙完成の根本原理である。イエスの奇蹟はその愛の顯れ、卽ち、徵であつた。キリストの十字架の死からの復活は其の最大最高なるものである。

四

最後に著しい事實は、イエスの奇蹟は我等に信仰がないときには行はれなかつた事である。彼は故鄕ナザレに歸へり給ふた時、鄕里の人々は彼の敎におどろいたが、「あれは大工のヨセフの子ではなかつたか。あれの母はマリヤ、あれの兄弟や姉妹はわしらがよく知つて居る者ではないか」と云つて彼を信じなかつた。丁度多くの人々がイエスは我等と同じ凡の人間ではないか。それがどうして死者を甦らし、難病を醫し、天然を制御することが出來やうと云つて、彼を信じないのと同樣である。而して信仰のないところに奇蹟は行はれなかつた。

彼らの不信仰によりて、其處にては多くの能力ある業を爲し給はざりき（マタイ傳一三・五八）

とある。又マルコ傳には「彼處にては何の能力ある業をも行ひ給ふこと能はず」（六・五）とある。我等の信仰なくしてはイエスは普に奇蹟を行ひ給はないばかりでなく、行ひ給ふことが出來ないのである。

奇蹟が行はれ、難病が醫されるには信仰がなくてはならない。それは必ずしも本人の信仰でなければならないとは限らない。難病に惱む者の母、子、友、その主人の信仰でもよい。全身癩病を患つた者は「主よ、御意ならば我を潔くなし給ふことを得ん」と云ひて醫された。百卒長の部下の中風は百卒長の信仰に由つて醫された。イエスは其の信仰を激賞して「斯る篤き信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし」（マタイ傳八・一〇）と云ひ、「ゆけ、汝の信ずるごとく汝になれ」と言ひ給へば、このとき僕いえたり（八・一三）とある。ペテロの外姑の熱はペテロの信仰の故に去つた（八・一四）。

イエスが病者を憐れみ之を醫してやらうと思ひ給ふた時には、先づ其の者から信仰を引出し給ふた。ツロとシ

ドンとの地方に旅行中、ある女が「主よ、ダビデの子よ、我を憐み給へ、わが娘惡鬼につかれて甚く苦しむ」とわめき叫んで彼の醫しを乞ふた。「されどイエス一言も答へ給はず」。女は拒まれても娘を愛するの餘り且つイエスの御能力を再三確信して訴へて已まない。そこで始めてイエスは答へて言ひ給ふた。

女よ、汝の信仰は大なるかな、願のごとく汝になれ。娘この時より癒えたり（マタイ傳一五・二八）とある。

信仰なくばイエスは醫し給はなかつた。信仰あらばからし種程の微弱の信仰でもそれに由つてイエスは醫し給ふた。その信仰が多少迷信じみて居ても尙憐んで「娘よ心安かれ、汝の信仰なんぢを救へり」（マ〇イ傳九・二二）と云ひて之を醫し給ふた。イエスが只一言を以て湖上の風波を制し、又自ら海上を歩行し給ふたのは、只無意味に自分の能力を誇示するためではなかつた。弟子たちをしてイエスを信ずる時は假令水火を潜り、刄の下を通過するも安全であるとの信仰を起さしめるためであつた。

なにゆゑ慮するか、信仰うすき者よ（八・二六）。

之れ風波を制する時弟子への叱責であつた。

ああ、信仰うすき者よ、何ぞ疑ふか（一四・三一）。之れ水上歩行の時ペテロを誡しめ給ふた御言であつた。かくして弟子たちの信仰を强め、彼等を以て神の國の中堅とし、彼等を用ゐて神の國の福音を四方に宣べ傳へしめ給ふた。

往きて宣べつたへ「天國は近づけり」と言へ。病める者をいやし、死にたる者を甦へらせ、癩病人をきよめ、惡鬼を逐ひいだせ。價なしに受けたれば價なしに與へよ（一〇・七、八）。

之を要するに、イエスの行ひ給ふた奇蹟は天地を創造し支配し給ふ神の能力の顯はれであり、それは又神が宇宙完成の御旨の表示であつた。卽ち、天地に神の愛の如何なるものであるかを顯はし給ふ事が天地創造の目的であつた。それ故に奇蹟はその愛を示すことであつた。珍らしい事件でなく神の國の徵であつた。

此の奇蹟はイエスが完全なる人の子として父ある神に絕對に服從し、信賴し、その御意と一つになり、我等を

憐れみ、其の悲痛に同情し、其の苦惱を我が身に負ひ、之に代つて己が生命を與へやうとする愛に由つて、神の能力を以て行ひ給ふたのである。實に彼の一生は我等の靈の惱み肉の苦しみを救ふために全く献げられた生涯であつた。そのためには少しも疲れしことなく、否、自分の身體も心も綿のやうに疲れ果てても、尙も人を救はんとの愛の生涯であつた。彼は我等の癩病、我等の兇惡を物ともせず、「かれは自ら我らの疾患をうけ、我らの病を負ひ」、自ら我等の兇惡を受け、我らの罪のため死し、我等の肉の病、靈の罪をいやし給ふたのである。

彼が此のことを成就し給ふためには一時一刻も父なる神と離れることなく、只父なる神の聖意のみを行ひ給ふた。彼に我なるものはなかつた。「人を救ひて己を救ふこと能はず」である。父なる神との此の一致、そのための献身、我等への憐憫、同情、愛、これが彼の教であり又彼の醫しの奇蹟であつたのである。それ故に我等は全身全靈を以て彼を信じ、一切を擧げて彼に委ね、彼の教に服ひ、以て我等の靈魂のみならず、我等の肉體の救を獲得し得る。我等はイエスを信ずる信仰に由りイエスの父なる神を神とし、その子たる恩惠を享受し得る。かくして父なる神がイエスに與へ給ふた天地自然力以上の靈能を受けて、啻に自ら醫されるのみでなく、弟子たちのやうに我等の愛する同胞の苦惱を醫すことが出來るのである。まことにイエスの出現に由つて神の國は到來した。イエスは言ひ給ふた。

我もし神の御靈によりて惡鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝らに到れるなり（マ〇イ傳一二・二八）。

「さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふな……。まづ神の國と神の義とを求めよ、然らばこれらの物は汝らに加へらるべし」（六三一、三三）である。イエスをキリスト（救主）として信ぜよ。病氣は醫され、經濟問題は自然に解決される。

イエスの權威に就て（上）

森本慶三

イエスにキリストたる資格、卽人を救ひ又は裁くの權威が果して有るや否やとは、當時にありて已に其代の指導階級たる學者宗教家達によりて、度々イエス自身に向て詰問されたことは、聖書に於て我等のよく見る通りであります。其後今日に至るまで、イエスは神か人かといふ所謂イエスの神性につきて、多くの議論が神學者の間に闘はされ、現代に至ては多くの人々は、かゝる問題には餘り意を留めざる樣になり、基督信者の間にさへ所謂近代思想を主んずる人達は、イエスの神性などは過去の事として問はない風に見へます。併し私はそうは思ひません。之は實に聖書の依て立つ土臺石であり、信仰の根底である。若し之が覆へさるるならば、聖書の教ふる眞理は其重點を失ひ、救も潔も無意無力になつて了ひませうと。今遡て當時反對者に對して、イエス自身が此問題につきて說明立證されました言辭を、聖書の中より抽出し、之に基きて私の所見を披瀝して見たいと思ひます。

ヨハネ傳はイエスのキリストたることを說くのが、其主要目的であると、其卷尾に明言して居る通りに、此點に就ての所論は殊に明細を極めて居ります。其中第五章二十節以下に於けるイエスの說教の要點を擧げば、

第一、洗禮ヨハネの證言　（三三――三五）
第二、イエス自身の言行　（三五――三七）
第三、神の言たる聖書　（三七――三九）

の三點でありますが、私は今も一つ

第四、各人の道德的努力　（ヨハネ傳七ノ十七）

を附け加へたいと思ひます。

第一、ヨハネの證言は卽預言者の證明であります。ヨハネは預言者の代表的人物であり、又廣く世に出でたる各國各時代に於ける、直接イエスに就て說きたる聖徒達の典型であると見てもよいと思ひます。故にヨハネがイエスを神の羔として世に紹介したることは、其後多くの學者聖徒殉教者等が、筆を以て、口を以て、又身を以て其

世の人々に向ひ、又遠く後世の吾等にまで證明して居るものの先鞭といつて然るべきであります。

此人達の證明に就ては、我等は大に考へねばなりませぬ。政略家や凡人無學者などならばともかく、人間中の眞面目なる人、誠實なる者、學識ある人の言行に向つては、我等は宜しく多大の敬意を拂ひ、其言ふ所に傾聽し其行ふところに注目せねばなりませぬ。只一時でなく數百千年に亙つて、かゝる人の中の人として尊敬すべき人達の教ふる所には、必ずや大なる眞理の含蓄されてあることを認めねばなりますまい。彼等が口を揃へて均しくイエスはキリスト、神の獨子、人類の救主なりと稱贊尊崇するには、そこにそれ相當の深き理由あることを考へて、我等自身も亦愼重に熟慮せねばなりますまい。かくして終には我等もまた彼等の所說に贊同することを喜びとするに至りませう。

第二、次にイエスは言ひ給ひます、人は如何に偉大であつても、畢竟罪あり過あるを免れぬ弱き人の子である。其證言は誠なる心より出でしものとはいへ、尙全く不明過誤を脫することは出來まい。故に之に對しては可なり異論もあれば、反駁も加へらるる餘地あるを如何せん。故に我は只單にヨハネのみの證言を以て甘んずるものではない。我は人の言證を力とし、他人の證明にのみ依賴せんとするものではない。更に强き更に大なる證明を提供することが出來る。それは外ではない我自身の言行である。如何に人を用ひて大々的に廣告しても、其者自身に眞價がないならば何にかなる。汝等宜しく我自身を調査し、吟味し、試驗して果して我に神の力、神の愛が存するや否やを知れよと。こは實に大膽なる提唱である。眞によく其自信のある者でなくては、狂者にあらざる限り、到底發し得ぬ言であるといはねばなりませぬ。聖アウガスチンはイエスを評して「彼は神か、然らずんば狂人なり」と申したそうですが、實にその通りであります。

ことに此處に注意すべきは彼は我言ひし教とのみ言はずして、我行ひし業と言ひ玉ひし點であります。世の多くの偉人思想家と稱するものに就て度々言はれます。「彼

の思想は彼の生活よりも偉大なりと」是卽言行が一致せざることを皮肉つたものであります。言ふは易く、行ふは難しであります。我言を聽けよと逼る者は多けれども我行を見よと挑み得るものは至て僅少であります。

イエスの教說そのもの因より深遠絕妙でありまして、彼を捉へに遣されし捕吏の一人が、驚嘆の餘り、「我等まだ此人の如く言ひし者を見ず」（ヨハネ七ノ四六）との言を殘して、終に手を出し得ざりしとは、實に宜なる哉と思ひますが、更に驚くべきは、刑架の上より一兇漢の發せし、「此人は何も惡しき事は爲さざりしなり」（ルカ二十二ノ四一）との眞率なる證言こそ、蛇の道は蛇と言はるる惡徒の慧眼にも、何等の罪過を洞見し得ざりし程純潔崇高なる彼の行動を表明して遺憾なしともいへませう。吾等が福音書を繙きて、彼の教訓よりも寧ろ、多く彼の奇蹟又は善行が載せらるるのを見ても、福音記者の此點につきての深意の存するところを窺ふべきであります。この事は我等が聖書を學ぶ時の着眼點につきて、多大の暗示と明訓を與ふるものであります。（以下次號）。

柏木通信（第廿六信）

齋藤宗次郎

柏木の近狀 平靜無爲沈默の日は準備蓄積の日として尊く、多端活躍勤勞の日は恩惠の赫耀力の發現正邪戰鬪の日として又尊くある。晩秋初頭を靜寂の裡に送りし柏木は、過去一ケ月を甚だ賑かに過した。殿軍と先驅を兼ねたる紅白の山茶花は冬に入つて輝く翼を收め、落葉の梅櫻楓桐は園庭に淋しき姿を見せても、內に健康と歡喜と滿ち、外より淸客喜信の臨むあれば永久の春に見舞はれし觀があつて感謝に堪へなかつた。○祈と畏れとを以て周到に執掌し來りし內村全集も、刊行開始以來順潮に進み、其半ばなる第十回配本教義研究上の校正も年內に濟んだので、廿六日夕編輯室の方卓を圍みて意義深き感謝會を開いた。天使天軍の歌に和する全國同志の祈も聞えて、新日本の誕生の寔に夢幻に非ざるを思ふた。○柏木日曜學校と柏木教友會のクリスマスは、廿四日の晝夜に行はれた。前者の天眞と後者の純朴とは、共に時流を外にして主の御心に從ひしものと信ずる。三十餘年の御生涯に加ふるに其十字架と復活昇天と、一千九百年間に

亘る聖靈の御惠みとを合せ考へて、かの厩の一隅に起りし事實を仰ぐ時に、神の愛の無限に感涙なきを得なかつた。○クリスマスより新年に至る間に於て、教友の愛心は祈に添へて菓子となり果物となり魚類となつて贈られしを見、且味はしめられた。朝鮮を廻る異端者の叫びに靡かず、全集に養はれ行く多くの殊勝なる兄弟ありとの報を齎す友あるかと思へば、歐米を巡り來つて、内村先生の名が意外の地にまで知れ渡つて居るのに驚喜したといふ話を遺して去る人もあつた。此時予は思はずも、汽車汽船自動車よ、飛行機よ無線電信よ、靈界の準備は既に成れり、汝等を操る惡魔の手を離れ、各々本來の使命に立ち歸つて神の榮光人類の平和の爲に潔き器となつて働けよとの聲を放つた。之に應ぜんことを望む。

日曜の集會

一、新約聖書の背景　山桝儀市
一、アブラハムの後裔とは誰ぞ　藤本武平二
一、聖地(パレスチナ)に於ける荊棘(いばら)に就て　大賀一郎
一、永久に殘るもの　大島正健

元旦に於ける今年第一の集會には藤本武平二氏司會、先づ君が代を合唱し、詩篇第一篇朗讀、開會の祈禱、讃美歌二三番の後大要次の如き年頭所感を述べられた。「一年の計は元旦にありといふ。我等は如何なる心を以て之を迎へ、且つ滿洲問題、露國米國との關係、聯盟の成り行等の外交上、政黨政治の失敗、獨裁政治の計劃等の政治上、全國的信仰不振の實情、青年指導に無力なる現代教會、マルクス主義の瀰漫等の思想宗教上に於て國家の全面に亘りて幾多難問の勃發を豫想さるゝに對し、之に處するに如何なる決心を懷くべきかを考へて見たい、我等内村先生より信仰のみによつて義とせらるゝ基督教の奥義を學びし者は、此際深く内省して各自の信仰の内容を再吟味するの要ありと信ず。十字架を仰ぎ瞻るといふ根本精神が感情的觀念的内面的個人主義に止らば、不知不識の間に自己陶醉に陷つて愛の活動の事實なき虚空となり了るを免れない。徒らに純福音なりと呼稱し自認するも實際はキリストを眞に仰ぎ居らず、聖書をも見過しにして居るものである。我等は何人何事に對しても根本解決の指導精神を完備せる聖書を正しく學び、キリストの血に生命化せられ、靈と肉との二つながらに於て神と人とに仕へねばならぬ。事此處に達せんか、朝鮮滿洲支那の問題は愚か、世界列國に對しても正義と愛との實現斷行によつて眞に世の光たり壇たるの善美の範を示し、全く神の御力によつて人類的平和を招來するに至るであらう。之が爲に我等は各自皆神の要具たるの實を擧げねば

ならぬ』と、是れ一同の肺腑に深く響く所の警醒の聲であつた。數名の祈禱の後大島先生の祝禱を以て閉會。

洗足會例會　罪の子の膝下に身を屈して洗足の水を滴らし給ひしイエスの尊き御心、然り其十字架の血汐に洗ひ潔められし愛と謙遜の心を以て人々各々隣人に對するならば世に難問題の起りやう筈はない。初冬の或日の夕市内弦卷なる駒澤水道部の公舍實田氏宅に主に在る兄弟八名集合した。樂しき晩餐を偕にする間に神の御子の新しき誡めを思ひ起した。之について我等は歌つた、御言葉を聽いた、互に祈つた、各實驗を語つた。馨はしき香は天に上りイエスの肉と血とは一同の靈に灌がれた。軈て夜は更けんとした。衣袂を列ねて歸路に就いた。五十尺に餘る二基の大給水塔は寒天に聳立して、實田所長の懇ろなる祈の下に日夜滾々盡くることなく東京市民の生命に供せらるゝを思ふて崇高の感に打たれた。神の惠みを感知せざる市民に代りて感謝しつゝ塔下を距つた。

大手町講演會　無計劃無方針の集會であつた丈け、人意以上の必要と精神と純清とが、其開始と指導と結果とに横溢するを疑ふことは出來ない。目盲し耳聾する人は知るまいが、今や大革命の時である。四百年と云はず千九百年を閉す暗黑の帷幕を破つて十字架の愛の普遍、神の教會の實現によつて世界人類否宇宙間の諸問題の解決すべき光明が門邊近く迫れる時である。聖靈は義を追慕して歇まざる青年に降つた。計劃と方針とは既に神の掌中に定まる。神の國を宿されし者起たざるべからず、叫ばざるべからず、必ずしも雄辯を要しない、又群がる聽衆を求めない。彼等は否み難き命に服してカルメルに祈りテコアに考へユダヤの曠野に宣布の聲を卒直に揭げればそれで足りるのである。十二月十八日午後二時、東京丸の内衛生會館は誠に善き任務を畢へた。予は一百の人々と共に此事實を見聞せしを喜ぶ。選に預りし敬愛する鈴木俊郎（司會）山本泰次郎（失樂園以後）星野香澄（滅亡の彼方へ）石原兵永（今日の最大問題）の諸氏も亦大なる感謝を以て凱旋の途に就たであらう。

石河畵伯個展　昨春歸朝後山中湖畔に靜かな夏を過せし氏は、十一月末に突然銀座紀の國屋書店樓上に聖地並に滯歐中の作品展覽會を開いた。予は勿論其道に無智の者であるから美術的の批評は出來ないが。之を觀賞して快哉を禁じ得なかつた故に所感の一端を茲に披瀝するのである。一日予は少からざる期待を懷いて其會場に臨んだ。案の如く「エルサレム城内の路」「ヨハネの古郷」「サフエドよりガリラヤ湖を望む」を始め五十餘點が、皆夫々予の心を美の國光の國望の國へと導いた。中にもダ・ヴインチの「洗禮ヨハネ」の模寫に至つては敬虔自

由其神秘の點までも寫し得て、此不可解とも稱すべき大作の預言的半面を解かれし樣に思はれた。其筆致其忍耐努力の外に、人知れぬ祈と良心の苦闘なしには畫き得ざる業たるを確認した。嘗て中村不折畵伯が渡佛の一青年に對して君、聖書を讀み給へ、心が清くなければ繪は描けないよと言はれしを聞いて感激したことがあつたが今や石河氏の如き靈感を其儘繪畵に移す人の現はるゝを見て、美術は信仰の產として神を嘆美するの具たる淸域に達するを發見した。日本國の將來は此方面に於ても希望に燃ゆるものあるを痛感しつゝ靜かに階段を下つた。

扇ケ谷感謝會 視よはらから相睦みて共にをるは、いかに善くいかに樂しきかな。小寒入の前日、信仰の友十名東京を立ち、鎌倉に江原氏夫妻を訪ふて天國の前味を味はしめられた。其處には「我が爲」と「我等の爲」とは微塵も起らず、過去と現在とを思ふて感謝し又未來を望んで感謝であつた。感謝々々感想も感謝祈禱も感謝扇ケ谷の五時間は凡て感謝、政治、教育、軍事、經濟、思想、宗教の暗澹混沌八方閉塞の中に在つて此大感謝を献げ得るは只全く神の恩惠に因るのである。最後に江原氏の尊き體驗と高き希望とを聽きし後、我等は全國民全人類と共に神の賜ふ感謝の恩惠に預らんことを祈つて散じた。

二旅人を送る 共に天國への旅立であつた。一人は壯齡四十歳の峯岸たえ子姉一人は高齡八十六歳の片岡和房兄、姉は强烈なる病苦と其死を以て家人を主の十字架に結び、世に愛と信仰の力を示して去り、兄は神に隨順なる生涯の平和祝福に滿つるを證明して逝いた。勝利の旗は高く其先途に翻るを見る。死は生よりも重く尊し。

聖靈奧羽の野に 降りて古、小亞細亞の地がパウロの足跡を印する前に聖靈によりて福音に預るの準備をせられし如く、內村全集の配本に先ち意外の人々が其靈を開かれ、遂に之を讀むに及びて其靈肉の上に大變化の起りし奇しき事實を水野辰三兄より聽きて、一同神を讃美した。

身邊漫筆

○舊臘二十五日毎月一回私の宅に集る人々のクリスマス感謝懇親會を催した。人數は九人、然るに其の一人一人の感話を聞いて私の心は歡喜に滿ちた。此の一年間の勞働に對する餘りある酬を受けた。集まつた者は誰一人心から溢れる歡喜と感謝とを語らない者はなかつた。世の中は不安、不平、不滿が至るところに聞える時、我等の集ひは喜悅と平安と希望とが滿ちて居る。世界何處にかこんな善い集りがあらうかとさえ私は思つた。

○我等の集には貴族の家の人もあれば日給者もある。教授もあれば商人もある。然かも同じ食卓について和氣あいあい、主に在る者には世間的階級の區別は少しも感じない。私は飯野君の感話に強く感動した。昨年經濟界の不況で苦しんだ、その時信仰がどんなに自分を支へたかその實驗は私の語る福音の眞理を證明してくれて非常に勵まされた。私は又白石君の感話に感動した。彼も亦同樣の經驗をして、聖書は永い間學んで居たが基督教の眞髓を把握したのは今度が始めてだと云ふ。我等は皆キリストが我等の救主であり給ふこと程我等の大なる感謝はなく又平安はないと云つた。

○キリストが我等に代つて死し給うて我等は既に死んだ者である。而してキリストが我等の義として復活し給うて我等の「生命はキリストとともに神の中に隱れ在」るのである。今我等が生きて居るのは「我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるに由りて生くるなり」である。それ故に「最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生き」給ふ。キリストである。各自のうちに宿り給ふ同じキリストである。故に我等はキリストに在つて一體である。キリストの體である。その四肢である。それぞれが其の異なる境遇、才能、性格を以て各一つの主イエスキリストの恩惠、その限りない生命を顯はすのである。故に我等各自は互に尊敬し、互に愛せざらんとするもそれは不可能である。我等死してキリスト各自の内に在りて生き給ふことを深く信ずれば信ずる程、我等は父なる神の下に兄弟姉妹である。今年は

益々私の集は此の信仰で進みゆきたい。

○一月號の「教會主義と無教會主義」に就いて日本基督教會の長老である京都第三高等學校の教授、山谷省吾君から左の書翰を寄せられ有り難く思つた。

『眞理』の卷頭の語、多くの共鳴點を見出します。私は御承知の如く、教會內部にそだち、今に至るまで二十年間教會の爲に働き來つたものでして、尊敬する人々の御叱にもかゝはらず、教會（地上の）（目に見えぬものは勿論ですが）に對する愛着を感じ、貴兄等よりすれば餘りに捉はれてゐると御感じでしようと思ひますが、『教會主義と無教會主義』は大體同意したくあります。云々

私は私の「徹底的無教會」の主張が教會側は勿論無教會側からも反對されるであらうと豫期して居たところ、教會側から此の好意ある批評を受けて我が友は至るところにあるを知り、眞に嬉しかつた。

○キリストを信ずる者には友は教會側にあるやうに無教會側には勿論ある。東京帝大教授の南原繁君の左の書翰を讀んで其の深い同情に私の兩眼は涙で濡ほつた。

御消息は毎月の誌上に逸早く拜見するのを心待ちにいたして居ります。過ぐる一ヶ年の義務を立派に果たされたことを心より御喜びいたします。新年號誌上の『孤獨と友』は大なる眞理を道破したものであります。これを語りし人の上を誰か涙なくしておもふことが出來ませう。

○深くキリストを信じ、一切を彼に托して彼のために生くる時、世にない幸福を感じる。新年には多くの人の愛を受けた。一月五日柏木教友會の有志の人々が打ち揃うて來訪されて嬉しかつた。聖書の眞理は善き友を作りつつある。其の時來訪の某夫人に由つてそれを知つて喜こんだ。その夫人が私が豫期に反して血色よく元氣で大聲に語るのを見て驚いたと云はれたが、それ程私の健康も回復して來た。今年は一層イエスキリストの恩惠を語り度い。『イエス言ひ給ふ我がため、福音のために或は家……をすつる者は誰にても今、今の時百倍を受けぬはなし、また後の世にては永遠の生命を受けぬはなし。』

『宗教と國家』反響

○『宗教と國家』は出版勿々であるが、私に達した反響は大きい。江藤治吉氏の如きは友人に贈るためとて二十餘部に署名を求められ、其他取纏め二十部、四十五部と註文がある。之が出版を犧牲的に引受けられた岩波氏に感謝しなければならない。田村次郎君の左の書信は嬉しかつた。

「宗教と國家」を大なる感動を受けつつ讀んで居ります。此の出版は日本國に對し最大の贈物をなさつた事と御喜び申します。實を云ふと雜誌で讀んだ時はこれ程の感じは受けませんでしたが、本になつて纏まつて讀む事はよい事と思ひました。

○雜誌掲載の分は此の書の丁度半分である。此の書を通讀した人は私を動かした背後の力を見て頂けると思ふ。帝大經濟學部の矢内原教授の手紙は有り難かつた。

新年勿々第一の讀書として熱心によみました。……エレミヤ研究では貴兄の信仰と熱意に動かされました。ほんんとうは多分貴兄の信仰と熱意とを動かし給うた大なる聖力に動かされたのでせう。何しろ御世辭なしに良書を日本に提供せられしことを祝賀し且つ感謝します。

○又法學部の南原教授の同情ある書信に感謝した。

我が國で今までの同種の研究が主として詩人的もしくは純宗教的方面の感があつたに對して、長く社會國家の諸問題について學識と經驗とを積まれた新たな著者を得て更に新たな生面の開かるべきを期待し、興味を以て拜見せんとして居ります。殊に我が國現今の如き最も哀しむべき狀勢の時代に正に此の書の公刊せられたことはひとり著者が苦難の戰の中からの靜かなる悅たるのみならず日本宗教上、ひいては國民的文化の問題の上に大なる光を投ずるでありませう。恩師在せしならば如何に喜ばれることかと、あの偉大なる微笑を著者とともに私は想像する者であります。

○私は此書の公刊について眞に感謝しなければならない隱れたる一人を有つ。それは私の妻である。一人で家事を整理し私をして專心この著述に沒頭せしめくれたのみならず繁雜なる拭掃除等の側、數百枚の原稿の淨寫、數回に亘る校正、彼の女の此の獻身的助力なくして此書は書かれなかつた。「主人はキリストに一身を獻げ家のことは顧る暇がありませんから、私はその事で主人を煩はせまいとして居ます」。之が感謝會での感話であつた。

三谷隆正・同壽貞子共譯
キング夫人原詩

病院での說教

定價二十五錢　送料二錢

病める人、惱める人に苦難の意味を知らせ、之を勵まし、希望を與へる良書である。福音の眞の理解なくしてかかる美はしい詩は書けない。私は此の詩を讀んで日本婦人にこう云ふ詩を書ける人が此の後多く輩出され度いものだと願つた。

東京九段坂
振替東京六二七三　**向山堂書房**

花房飛虎二著

聖書六十六卷の要領

布裝函入表付　定價一圓

著者は同信社中の新進熱誠の傳道者である。本書は新舊兩書中の各書の要頭を記述し、其の大要を把握するの便に供したものである。他日之を基礎として新約全體に亘る眞理の系統的著述あらんことを私は期待する。

名古屋市流川町
振替名古屋九四四五　**一粒社書店**

（聖書の眞理社にて受次）

江原萬里著

宗教と國家

—エレミヤ記の研究—

四六六頁　厚紙裝幀
一圓八十錢　送料一四錢

新刊勿々好評、目下出版元品切の由、聖書の眞理社にても手許僅少。

東京市神田區一ッ橋　**岩波書店**

江原萬里著

聖書的現代經濟觀

二八〇頁布製　一圓二十錢　送料八錢

最近「私の思ふ所、求むる所の期待以上の光と力とを頂く事を玆に厚く感謝致します」云々の感謝狀を受取つた。

東京市淀橋區柏木九四六　**獨立堂書房**

若し本誌讀者にして上記二書に著者の署名を需められる方は聖書の眞理社に申込まれば惡筆を揮ひます（江原）

昭和七年度聖書眞理合本　布裝美本二圓半
同　六年度　同上　二圓半
同　五年度思想と生活　各送料共　三圓卅錢
同　四年度　同上　一圓八十錢
同　二、三年度同上　二圓
全部註文の方には八圓　但し聖書の眞理社申込に限る。

聖書の眞理定價（送料共）

一部　二十錢
半年（六部）　一圓十錢
一年（十二部）　二圓十錢
海外一年　二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社（振替東京六三三七五番）へ。獨立堂にてもよし

昭和八年一月三十日納本
昭和八年二月一日發行

編輯印刷兼發行人　神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三　江原萬里

發行所　東京市澁谷區向山町九七　**聖書の眞理社**

印刷所　東京市神田區三河町三ノ四　今井印刷所

發賣所　東京市淀橋區柏木四丁目九四六　獨立堂書房
振替東京一九四六番

【本誌定價二十錢】